

ゴッホ全油彩画

ドイツのベネディクト・タッシェン出版から出ているフィンセント・ファン・ゴッホ全画集を訳し終えたのは3年前の夏のことだった。印刷から製本まですべてドイツで行い、ようやくこのほど日本語版が出版された。

ゴッホが生前に描いた油彩画約870点すべてを収録し、しかもほとんどが色刷りである。印刷や本文の水準もさることながら、特筆すべきはその装丁である。堅牢な箱に入った大判2巻本は、現代の日本では望んでも得られない贅沢な作りだ。書物を単なる情報の媒体ではなく、工芸品と考えるドイツ人ならではの装丁と言えよう。革張りの豪華版に至っては、まるで調度品である。



ゴッホは我々日本人にとって非常になじみのある画家であるが、その全作品を年代順に見ていくと、読者は新たな感動や発見を経験する。特にゴッホがパリに出る前のオランダ時代に描いた作品はこれまで知られていなかったものも多く、画家ゴッホの誕生の秘密をかいま見る思いがする。

たとえば、短い生涯にあれほど多くの自画像を描いたゴッホだが、不思議なことにオランダ時代には1枚の自画像も描いていない。1886年、パリに出てきたゴッホは都会人にふさわしい風貌を身につけようと、美顔術を受けた。端正な顔立ちをしたゴッホの自画像第1作が描かれたのはその直後である。それからというもの、ゴッホはしばしば自分の顔を鏡に映し、キャンバスに描いた。

このとき、ゴッホは「農民の画家」から都会の画家、すなわち印象派の画家へと転身を図っていたのである。

(ナショナル・ネーデルランデン「オレンジ・ライン」1995年11月)